
許さない

鹿波リオ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

許さない

【Nコード】

N9472D

【作者名】

鹿波リオ

【あらすじ】

次々とコナン達が襲われる！？香凛とコナンが誘拐去れる？許さないこんなこと今平次達が犯人に挑む！！

許さない

(前書き)

香凜が嫌いな方はお読みにならない方がよろしいと思います。

許さない

許さない

博士が撃たれた探偵君の電話の声を聞きながら病院に向かって走る。

「コナン君博士は？」

「一命はとりとめた」

「よかった」私はコナン君と平次君を呼び話す

「あの海中レストランの時と似てるから気をつけてね」

「ああ…でも今回はなにもないんだあのとき見たいに次に繋がる証拠がな」

「分かり次第連絡をする事それとあつてはほしくないけどまた、誰かが狙われたらそれも連絡する事…」

「分かった」

「これ以上犯人の思う壺にはさせへんで」私達は互いに身近な人は必ず守ることを誓った。コナン君は蘭さん平次君は和葉さん私は快斗と言う風にして別れた。「探偵団が？」

「ああ幸い4人とも軽い怪我だ…」

「4人と言うことは…元太君に光彦君哀ちゃんと歩ちゃんかすぐに快斗連れて行くね…」快斗を連れて探偵君達と話す

「誰も犯人の顔見てないか…また、振り出しか…」

「振り出してっなんか証拠あつたのか？」

「証拠訳じゃないけど50音順かな？てっ思っただけけどコナン君が狙われないと言う事は違うなあー」確かに何故こんなに順不同で身近な人が狙われ行くのか検討が付かない…

「明日私事件の依頼入ってるから快斗気をつけてね…」

「ああ…分かった…」いつ誰が狙われてもおかしくないからと言う香凛は深刻な顔だった。次の日

「なるべく早く帰るから」と言つて探偵の仕事に向かう。

「やっと終わった」電話がなる。

「はい…和葉さんが！？すぐに行くね！！」何故快斗じゃないのか

疑問を抱えながら病院に向かう

「ごめんなー香凛ちゃん心配かけて」

「いえとんでもない…よかった大きい怪我じゃなくて…平次君気をつけてね次は貴方かも知れない…」

「なんでや」私は3枚の紙を出した。「もしかしたら誰かの周りから狙われ行くのかなてっ思って…まずは平次君からと思っつて円を作っつて見たけど和葉さんが狙われたから違い」と言いながら紙を書いていく。

「結論から次に誰が狙われるかによつて最後に狙われる人が分かるの」「だから、気をつけてね…」次の日電話がなる。

「はい…もしもし…小五郎さんがはい…お大事に…」

「おちゃんが」

「これで最後に狙われる人が分かった…いくよ快斗」その後工藤邸に集まる事に

「調べた結果私が最終的に狙われる事になるわね。」「蘭さんが狙われないから確実ではないから気をつけてね…コナン君」

「うん！！分かったよ香凛姉ちゃん！！」

「有り難う…コナン君…くれぐれも…無理しないでね…お願いだから…蘭さん…が泣くようなことはしないでね…」「ああ…」次の日私がちよつとはなしたすきに快斗が

「快斗動かないで」私は止血をしながら救急車呼んでいる

「急所は外れてる」私は探偵君に電話する。

「うん…蘭さんが分かった…」なにがしたいのか

「次に平次君が狙われる」コナン君が狙われたら全て分かる

「あ、危ない探偵君…」

「くっ」

「服部…」これで分かった最終的に狙われるのは私と言う事が

「コナン君も快斗も犯人のとこいくきある？検討はついてるから…」

「はあ？」コナン君は探偵モードに

「行くに決まっつてんだろ」「あつ快斗は怪我してるから来ちゃ駄目」

「嫌だね…うつ…何する…香凛」

「寝ててね…コナン君…いえ新一君行くよ」

「なんで…」

「今はそれどころじゃないでしょ？犯人を捕まえてからの楽しみ」

「でも」私は探偵君にヒントを挙げるため声を変える

「謎は謎のままにですよ名探偵」
「勿論キツドの声に変えた。声を戻して」

「行くよ敵討ちに」着いたのはある倉庫だった。

「行くう…」

「出てきて下さい。犯人の赤田尚樹さん…」

「赤田てっ…」

「そう私が解いた事件の犯人の弟さん…」
「やれ…」
「10人近くの人が出てきて俺達に掛かって来る。」

「貴方が掛かって来なさいよ！！」
「10人相手はすでに気絶していた。」
「私に恨みが有るんなら私だけにしなさいよ！！」
「お前自体を苦しめても意味がないからな」

「うああー」

「コナン君！？」
「大人しく捕まる事だな」
「素直に手を挙げる」
「それで良い」
「私は睡眠薬を嗅がされていた」
「このボウズはこの椅子にでもくっついておけきつく縛るんだぞ」
【はい】
「こいつは手足をくっつてあの部屋の天井から吊り下げとけ」
【は、はい】

「ん…くっ」
「目が覚めたか…あまり喋ると酸欠で死ぬぞ」
「コナン君には何もしてない？」
「あいつはこの上で椅子に縛り付けてある。」

「な？」
「助けたくても無理だろ…」
「一方コナンは、」

「んーんー」
「起きたか…」
「赤田はコナンのガムテープを剥がす。」

「香凛姉ちゃんは？」
「あいつはそのうち酸欠で死ぬ。」

「何？」
「電話番号を教える」
「構えられた拳銃前で何も出来ず素直に電話の在処をいう」
「黒羽快斗と服部平次に電話しろ」
【はい】
「そ

のころ平次達は無事退院していた。平次の電話が鳴る

「なんや、ボウズ」【江戸川コナンと櫻井香凜を預かった返して欲しかったら明日午後3時まで赤田を釈放しパビリオン倉庫に連れてこい。】

「2人とも無事なんか？」【今のところはな】

「なんやと」その時、隣に居た快斗の電話が鳴る。「コナン君には何もしてない？」『あいつはこの上で椅子に縛り付けてある。』

「な？」『助けたくても無理だろ…』一方コナンは、

「んーんー」『起きたか…』赤田はコナンのガムテープを剥がす。

「香凜姉ちゃんは？」『あいつはそのうち酸欠で死ぬ。』

「何？」『電話番号を教える』構えられた拳銃前で何も出来ず素直に電話の在処をいう『黒羽快斗と服部平次に電話しろ』【はい】そのころ平次達は無事退院していた。平次の電話が鳴る

「なんや、ボウズ」【江戸川コナンと櫻井香凜を預かった返して欲しかったら明日午後3時まで赤田を釈放しパビリオン倉庫に連れてこい。】

「2人とも無事なんか？」【今のところはな】

「なんやと」その時、隣に居た快斗の電話が鳴る。「コナン君には何もしてない？」『あいつはこの上で椅子に縛り付けてある。』

「な？」『助けたくても無理だろ…』一方コナンは、

「んーんー」『起きたか…』赤田はコナンのガムテープを剥がす。

「香凜姉ちゃんは？」『あいつはそのうち酸欠で死ぬ。』

「何？」『電話番号を教える』構えられた拳銃前で何も出来ず素直に電話の在処をいう『黒羽快斗と服部平次に電話しろ』【はい】そのころ平次達は無事退院していた。平次の電話が鳴る

「なんや、ボウズ」【江戸川コナンと櫻井香凜を預かった返して欲しかったら明日午後3時まで赤田を釈放しパビリオン倉庫に連れてこい。】

「2人とも無事なんか？」【今のところはな】

「なんやと」その時、隣に居た快斗の電話が鳴る。「コナン君には何

もしてない？」『あいつはこの上で椅子に縛り付けてある。』

「な？」『助けたくても無理だろ…』一方コナンは、

「んーんー」『起きたか…』赤田はコナンのガムテープを剥がす。

「香凛姉ちゃんは？」『あいつはそのうち酸欠で死ぬ。』

「何？」『電話番号を教えろ』構えられた拳銃前で何も出来ず素直に電話の在処をいう『黒羽快斗と服部平次に電話しろ』【はい】そのころ平次達は無事退院していた。平次の電話が鳴る

「なんや、ボウズ」【江戸川コナンと櫻井香凛を預かった返して欲しかったら明日午後3時まで赤田を釈放しパビリオン倉庫に連れてこい。】

「2人とも無事なんか？」【今のところはな】

「なんやと」その時、隣に居た快斗の電話が鳴る【江戸川コナンと櫻井香凛を預かった返して欲しかったら明日午後3時までに赤田を釈放してパビリオン倉庫に連れてこい。】

「声を聴かせる」【分かった

「快斗兄ちゃん…」】

「コナン大丈夫か？」【「うん」】

「香凛は」【あいつはそのうち酸欠で死ぬ…もういいだろう…】

「どういう事だ？」

「とりあえず警部さんに電話や」「ああ」警部さんに事情を話す

「成る程すぐに赤田を釈放しろ…」【はっ】

「酸欠でしぬ…どうゆう意味なんだ…」「わからへんなあ？」

「くっそ」その頃香凛達とはゆくと

「くっ…意識が朦朧としてきた…」窓がひとつもない部屋に閉じ込められているから当たり前だ『おい…入れ』

「うあ

「コナン君!？」『こいつの命が失われなくなかったらこいつを首に掛ける…』

「それは？」『この丸い部分を首に掛ける、そして、あの鉄の棒に此処を掛けるそしたら5時間に1回500mlの水がバケツに入る。

このバケツは1000mlの水が入る詰まりお前の命は後10時間
「香凛姉ちゃん」

「分かりました…その代わりコナン君は無事に帰す事を約束して下さい。」

「香凛姉ちゃん…」 『早くこい』

「うああ…」 その頃平次達は

「めぐれ警部はん？はよいかんのか？」 倉庫の前まで来ていた

「待て平次君赤田がまだ釈放出来て無いんだよ。」

「後どんくらいかかるんや？」すでに此処に来て5時間が経とうと
していた。その頃香凛は

「バケツに水が入ってきた。な…うつ…ゴホゴホ」コナンはと言
うと『椅子に縛り付けておけ』

「くっ…」一方平次達は

「赤田がきた…」

「分かったいくか」

「ああ」今倉庫に入るところだった。その頃コナンは

「誰か来たよ」

「連れて来たで」

「コナン達を返して貰おうか？」 『良く来たな赤田と交換だ』 赤田
とコナンを交換する

「香凛は？」 『あいつは地下だ』

「くっそ今や警部はん」

「掛かれ」警部さんの声と共に刑事が沢山入ってくる

「高木刑事コナンの事宜しくお願いします。」

「ああ分かった。」俺達は地下に行く一方香凛は

「あいつ水の勢い早くなってる」ばん扉が開く

「快斗に平次君」

「香凛」

「うつ…」

――目が覚めたら病院だった。

「んー生きてる?」「生きてるはないやろ」

「ごめんね…快斗は?」

「さっきまで起きてたんやけどな…」ベッドで寝ていた快斗を見て
微かに笑みが凝れる。

「んー」

「おはよ快斗」

「香凛!」

「ごめんな」

「ふっふ」

「笑うな」次の日無事退院して。家までリハビリがてらに家まで
帰っていた。

「快斗」

「なんだ」

「またこんなことがあったら私が許さないから」

「何で俺に言うの?」

「なんとなく」本当だよ快斗また、快斗がこんなめにあったら私
が許さないから。

コナンはふと思った

「結局、教えてもらってないな。」

(END)

許さない

変ですね。

(後書き)

許さない

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9472d/>

許さない

2009年3月24日12時09分発行